

## 巻頭言

岩崎千夏(熊本市現代美術館副館長)

2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、美術館休館のまま始まりました。答えのない新型コロナウイルス対策に追われながら、コロナ禍における美術館の正しい姿勢とは何かを考え続けた年でした。

美術館は2月29日に臨時休館したまま、新年度になってもずるずると休館が続きました。

「三密を避ける」「不要不急の外出を避ける」など、判りやすく市民への注意喚起がなされる中、世の中全体が、美術館や劇場、映画館などの「娯楽」はもってのほか、日常的な買い物ですら悪いことをしているような、張り詰めた雰囲気でした。

私たちも、システムの整備もないまま在宅勤務を推進してみたり、試行錯誤の日々でしたが、何よりも、いつ開館できるか全く見通しがつかず、市民の皆さんにいつ会えるかも判らないことが、スタッフの大きなストレスとなっていました。しかし地震の時とは違い、人を集めること自体が市民を苦しめることになるかもしれないと思うと、開館を強く要請する気持ちにはなれませんでした。

結局美術館は、地震の時よりも長い82日間を休館し、5月21日ようやく開館しました。

今思えば、まだ、専門家も暗中模索の最中であつたのだと思いますが、先の見えない、本当に苦しい休館でした。

4月11日に開幕する予定だった「ライフ 生きることは、表現すること」展は、2020年に開催予定であった(実際には2021年に延期)パラリンピックに合わせた企画で、私自身、とても楽しみにしていました。

当時、新型コロナウイルスの感染拡大によって、全国、全世界の多くの美術館で、たくさんの展覧会が中止となりました。海外から作品を持ち込めないためとか、コロナが治まってから改めて行うために延期や中止を決めたものもありましたが、多くは、いつでも開けられるように準備をしているが開けられない状態だったのではないかと思います。

「ライフ」展も感染対策を取りながら作品を集荷し、会場を設営し、作品を展示してスポットライトを当て、いつでも来場者を迎えられる状態にして待機していました。しかし、4月になっても美術館という「不要不急」の施設を開けられる日がいつ来るかは検討もつかず、耐える日が続きました。

当然、担当が一番もどかしかったと思いますが、会期通りに展覧会を開けられないと判った時点で気持ちを切り替えて、どうすればこの開かない展覧会を外に伝えられるかを考え、日々の

ブログアップはもちろん、オンラインツアー、作家紹介用の映像の作成など、今までやってこなかったことに果敢にチャレンジしてくれました。

最終的に同展は25日間しか開けることができませんでしたが、担当者の発信、そして開会後の反響に、確かなうねりを感じました。

同展の出品作家は、生活の一部として表現する行為がなくてはならない人、気持ちを昇華するために表現を必要とする人、自分や人の障害や老いを客観的に表現しようとする人、普通は弱みであるところを強みに変えるための表現方法を考える研究者たちなど。

新型コロナウイルスの感染拡大初期の2020年4月から6月は、自分と違う意見に対する拒否反応、それに伴う他者への攻撃など、世界中が疑心暗鬼に陥りギスギスしている時でした。そのような中、自分とは違う価値観の肯定と、普通は弱みと思われるものへの共感、触れた人の心を浄化する力があつたように思います。一番苦しいあの時だったからこそ、世界中の人達に観ていただきたい展覧会でした。

6月末からは「谷川俊太郎 展」を開催しました。

当館は以前から、大衆文化、特撮、ファッション、演劇など、「美術」の枠にとらわれないジャンルの展覧会を企画してきましたが、今回は「ことば」の展覧会でした。

谷川俊太郎のおもしろいところは、彼の表現である詩を「読む」形式にこだわりのないところではないかと思います。

彼はこれまでさまざまな表現者とコラボレーションしながら、作品を発表しています。それは、書籍であり、映像であり、朗読であり、音楽であり、全く違うメディアなのですが、どのような形をとっても、最終的にはやはり谷川俊太郎の詩である、というところに立ち返っていきます。彼のぶれない「ことば」の力が、コラボレーションする表現に飲み込まれることなく立ち上がって来るのだと思います。

会場内には、音楽と詩と映像が融合したインスタレーションや新作のほか、谷川らしい遊び心がそここちにちりばめられており、私たちはさまざまな表現の「谷川俊太郎のことば」に対峙することができました。

暖かくなったら収まるのではないかと期待されていた新型コロナウイルスは、収まるどころか感染拡大し、外出や移動の自粛など辛い夏休みとなりました。しかし、そのような災いですら、谷川俊太郎の二十億光年の長大な時の流れの中を漂う凜としたことばの中では、小さな点でしかないのかもしれないと思えるような、大きな腕に包まれるような展覧会でした。

9月末から1ヶ月間は、第32回熊本市市民美術展 熊本アートパレードを開催しました。毎年恒例の市民公募展ですが、今年度のテーマは「〈ポスト投函サイズ〉であること」。広げると大小様々、形も色々な作品ですが、送ってくるときは全て34cm×25cm×3cm以内、重さ4kg以内のものに限りました。審査員のアートユニット明和電機が、作品として何を作る（描く）のかは自由であり、その規格に制限があるべきではないかと考えて出した今回のテーマ、どのような作品が出品されるのか、実はとても心配していたのですが、工夫に富んだユニークな作品が、多数出品されました。

この時期、「おうち時間」という言葉が流行りましたが、まさしくおうちでああでもないこうでもないと考える時間はさぞや楽しく、豊かな時間だったのではないかと思える作品ばかりでした。

年度当初、震災の時と同じかもっと深刻に、アートは「不要不急」と思っていた気持ちを、アートパレードに出品して下さった市民の皆さんの作品が「それでもないよ」と引き止めて下さったような気がしています。

11月中旬からは「ムーミン展 THE ART AND THE STORY」を開催しました。

フィンランドの芸術家、トーベ・ヤンソンによって生み出されたムーミンが初めて本になったのは1945年、第二次世界大戦末期のこと。世界中の人の気持ちが縮こまっているときに生まれたムーミンの作品に出てくる登場人物たちは「完璧な」善人でも「完全な」悪人でもなく、良いところも悪いところも持ち合わせ、悩み、失敗しながら日常を過ごしている、私たちと同じような存在です。

フィンランドは今、世界で最も幸福な国と言われています。国連が毎年発表している世界幸福度ランキングでも、4年連続1位。特に個人的主観による人生の満足度が圧倒的に高い結果となっています。一方の日本のランキングは50番台から60番台、健康寿命やGDPはトップクラスなのに、社会的自由や他者への寛容さは低く、人生の満足度は極端に低いという結果となっています。

1945年前後、フィンランドもまた、長く戦争に巻き込まれ、トーベも含め、多くの人達が緊張を強いられる日々を送っていたことでしょう。そのような中で、トーベが紙の上でムーミンの日常と向き合うのは、今の私たちのコロナ禍におけるおうち時間の過ごし方と、実は似ていたのかもしれませんが。人と比べるのではなく自分自身と向き合うこの姿勢と時間が、人生の満足度のヒントになるような気がしています。

ムーミン展は、年明けから再びコロナの感染拡大がはじまり、終盤は人数制限を余儀なくされました。それでも辛抱強く並んで入場し、500点にのぼる膨大な作品をじっくり見て、満足そうに帰っていかれる来場者の皆さんを見ながら、人生を楽しむ術を持つこのような方々の存在が、日本の幸福度も少しずつ上げていってくれるのではないかという希望を強く感じることでできた展覧会でした。

1月末からは「MINITURE LIFE展2ー田中達也 見立ての世界ー」を開催しました。

1981年熊本県生まれの田中達也は、300万人近いSNSのフォロワーを持つ、ミニチュア写真家であり、見立て作家です。

身近にあるものを何か違うものに「見立て」て、ひとつの風景を作り出し、その一瞬を写真に収めた作品で、子どもから高齢の方までを魅了し続けています。

ブロッコリーは樹に、コッペパンはパラシュートに、ごはんは雲に、田中の手に掛かると、その小さなミニチュアの物語の中に、あっという間に引き込まれていきます。

田中の作品は、作品を見て、タイトルを見て、もう一度作品を見て、なるほど・・・と思う、やられた!と思う、そして温かい気持ちになる、そこまでが鑑賞のワンセットのような気がします。

田中と私たちは同じ時代を生き、同じ社会を見えています。しかし彼の作品は、辛いことがあって

も、くすりと笑えて肩の力が抜ける日常が、実は周りにたくさんあることに気づかせてくれます。そして、これだけ多くの人々が田中のメッセージに共感するという事は、私たちが考え方や物の見方を少し変えさえすれば、世の中はぐっと居心地良いものになるかもしれないと気づかせてくれる展覧会でもありました。

無料の展覧会場、ギャラリーⅢでは、「高浜寛のマンガに登場するアイテムで読み解く19世紀末(ベル・エポック)―『ニユクスの角灯』、『蝶のみちゆき』...展」、「川野美華 展 Nighthawks」、「モヒカンポシェット 世界でたったひとつをつくる展」「コーダ・ヨーコ原画展 どうぶつえんのどうぶつたち」「豊田有希写真展 あめつちのことづて」等を開催。この年は、意図したわけではないのですが、若手の女性作家の展覧会シリーズとなりました。漫画家、画家、ファッションデザイナー、イラストレーター、写真家と分野は違いますが、いずれの作家も熊本、九州にどっしりと根を下ろして日常を送る女性達で、コロナ禍だからこそ余計に、自分の道を淡々と進む彼女達は輝いて見えました。

2020年は世界中の美術館で休館が相次ぎ、熊本県内の美術館博物館も、開館するための措置として、厳しいガイドラインを敷きました。入館するためには検温や手指消毒、更に氏名と連絡先を書いていたかなければならず、当館も、館内にあったソファや作品の一部を感染防止措置として撤去し、無機質なスタッキングチェアがポツンポツンと置かれました。

これまで当館は毎年、展覧会入場者の2倍から3倍の方がフリースペースに来館していました。館内は子育てひろばやショップ、貸し会議室を利用する人達、本やマンガを読みに来る人、待ち合わせをする人、ただゆっくりしに来る人などでいつもざわわしており、フリースペースの心地よさや訪れやすさの理由のひとつとして、「静かすぎない」ことが挙がっていました。

しかし新型コロナウイルス感染防止対策のために美術館の状況は一変、連絡先を書いてまでくつろぎに来る人は激減し、全館入館者数は、通常の年の半分以上となりました。館内に子どもの声が響くことも少なくなり、ガランと広く感じられることもしばしばでした。

私は、コロナ感染拡大後かなり長い期間、この当館の「くつろぎ」の機能が失われたことは当館の大きな損失であり、美術館の社会に対する役割が半減したように感じていました。しかし、振り返って考えてみると、様々なリスクが謳われている中で、敢えてリスクの多い街なかに「くつろぎにきたい」というニーズは、そもそもあまり高くなかったかもしれません。それよりも、目的や用事を決めて、その目的を達成したら寄り道をせずに帰る、というのが、コロナ禍にある人々の自然なリフレッシュの方法だったのかもしれない。

もしそうであるならば、コロナ禍である今は、市民の皆さんの「目的」や「用事」となりうる展覧会を企画し、そこから心に残る何かを持ち帰ってもらうことに全力を注ぐ時なのかもしれないとも考えるようになりました。

現代美術館で開催する様々な事業は、ほとんどのものが今、私たちと同じ時を生きている作家と美術館スタッフによって作られ、企画されています。或いは過去の作家を、今ここで暮らす美

術館スタッフの視点で取り上げます。

彼らは、私たちと同じ社会現象や世界の情勢に心を揺さぶられながら生きています。同じ時を  
生きているからこそ伝わるものがあり、心が揺さぶられることがあるかもしれません。

新型コロナウイルスとの闘いがいつまで続くのか、まだ判りません。しかし、私たちはいつも、  
市民の皆さんとともに、市民がより生きやすい(心持ちになる)社会のあり方を模索していく美術  
館でありたいと思っています。